



# つばめ農園おひさま便り

30

安溪貴子・安溪遊地

## 野のめぐみと日向ぼっこ

山々の緑が華やいで、今年是人影が昨年よりも多い阿東高原です。SLが走る山口線の列車を撮る人々も多く、愛知や埼玉ナンバーの車も駐まっています。そして田んぼにも農業を志す若者や、久し振りに帰省してきた家族の姿が見えます。溜池から水を得て、中国山地の山裾が「水の国」になってきました。つばめ農園も稲に大豆に夏野菜にと忙しくなりはじめています。

この季節は畑の端境期ですが、食卓にのぼる野の恵みが余りあるほどです。フキノトウに春の訪れを見て、やがて天麩羅でタラノメ、コシアブラ、ヨモギ、スイバ、柿の葉やユキノシタ、そして山裾にはウド、ミツバ、タケノコ、セリ、フキ、クレソンと続きます。今年はお師匠さんの庭から山菜のコゴミ（クサソテツ）とウルイ（オオバギボウシ）の苗をいただいて植えました。来年を待ちながら美味しい食べ方を学んでいるところです。

今年は、サツマイモの苗がどの店でも売り切れで、ホームセンターでようやくやしおれた宮崎県の苗が売られていました。そこでのお知らせでは、化学肥料が六月か



「日本の種子を守る会」の山田正彦さんに励まされる安溪大慧

ら四〇%の値上げとか。いよいよウクライナでの戦争と円安などの影響が、日本の食料生産そのものを直撃する構えです。

農業や化学肥料にたよらない野菜づくりとその流通について、いろいろ教わっている中村進卓<sup>のぶたか</sup>さん（中村自然農園・山口市）のところで修行中の大学院生の若者から、素敵な話を聞きました。

いろいろな野菜の栽培について、中村さんから課題をもらうんですが、どうにも難しいものが多くて、ネットで調べても答えが見つからないことがほとんどです。ところが、インターネットもほぼほほしいし、メールさえあまり読んでいない中村さんが、実にいろいろ

ろなことを知っておられる。それで、「どうしてそんなことをご存じなんですか?」と尋ねたんです。答えは、「そこの農家さんと日向ぼっこをすることだ。本にもネットにも載っていない、いろいろなことを教えられる」というものでした。

私どもは、これはまさに、宮本常一先生流の地域に根ざした知恵の聞き取りの極意ではないかと思ひました。全国一律でない、地域ごとに伝えられ蓄積されてきた経験、それが日向ぼっこをしながら問はず語りに学べたらすばらしいですね。

## 平和と食料の自給

宮本常一先生が、昭和二二年一月、周防大島の自宅から大阪や兵庫での農業指導のあとで、生涯の師であった渋沢敬三氏のもとを訪ねた時のことが思い起こされます。

……私は東京へ出て渋沢邸へいった。ちょうど役所（先生は当時大蔵大臣であった）からかえってきた先生は「幣原さん（当時首相）は大変なことを考えておられる。これから戦争を一切しないために軍備を放棄することを提唱しようとしておられる」と昂奮気味

に話された。

「軍備を持たないで国家は成り立つものでしょうか」とおたずねすると「成り立つか成り立たないかではなく、全く新しい試みであり行き方であり、軍備を持たないでどのように国家を成立させていくかをみんなで考え、工夫し、努力することで新しい道がひらけてくるのではないだろうか。一見児童に等しい考え方のようだが、それを国民一人一人が課題として取組んでみることだ。その中から新しい世界が生まれて来るのではなからうか」といわれた。これは実にむずかしいことである。しかし日本人としてやらなければならぬことではないかと思つた。この先生のことばは今も私の心の中になまましく生きています。学問をするということも、人が人を信頼する関係のうちたてていくためであり、どのようにすれば安心して生活していくことができるかを見つけていくためのもののであると思う。そしてそういうことについて、私にできることは何であろうかと考えた。今も考えつづけている。ただ戦争反対、軍備反対と叫んだだけで戦争はなくなるものではない。一人一人がそ

れその立場で平和のためのなさねばならぬことをなし、お互がどこへいてもはっきりと自分の是とすることを主張し、話しあえるような自主性を持つことであり、周囲の国々の駆け引きに下手にまきこまれないようにすることであろう。そしてそれを農民の立場から主張してゆくには、食料の自給をはかることではないかと考えた。食料を自給し得ている国は外国の干渉を排除することができる。それは今日までの歴史を見ればおのずから肯定できる。農民としてなさねばならぬことは、より高い生産をあげ、まず国民の食料を確保するように努力すること。次には国民の一人一人が安定した生活ができるような道を見つけていくことだと考えた（宮本常一、一九七八年『民俗学の旅』文藝春秋、一四八〜九頁）。

主権の回復と世界平和へのはるかな道は、何を育て、何をどのように食べるのかを、一人一人が自分に問いかけてながら、この連載の四回目（二〇二〇年一月号）に紹介した「食の主権」を取り戻すことから一歩づつ歩いていくしかありません。

（つづく）（あんけいたか・あんけいゆうじ）

 [a@ankei.jp](mailto:a@ankei.jp)  
 <http://ankei.jp>